

## 『教育プログラム』

### 2 医療人教育の基本的内容

#### (2-1) ヒューマニズム教育・医療倫理教育

##### 基準 2-1-1

医療人としての薬剤師となることを自覚させ、共感的態度及び人との信頼関係を醸成する態度を身につけさせ、さらにそれらを生涯にわたって向上させるための教育が体系的かつ効果的に行われていること。

【観点 2-1-1-1】全学年を通して、医療人として生命に関わる薬学専門家に相応しい行動をとるために必要な知識、技能、及び態度を身につけるための教育が行われていること。

【観点 2-1-1-2】医療全般を概観し、薬剤師の倫理観、使命感、職業観を醸成する教育が行われていること。

【観点 2-1-1-3】医療人として、医療を受ける者、他の医療提供者の心理、立場、環境を理解し、相互の信頼関係を構築するために必要な知識、技能、及び態度を身につけるための教育が行われていること。

【観点 2-1-1-4】単位数は、(2-2)～(2-5)と合わせて、卒業要件の1/5以上に設定されていることが望ましい。

##### [現状]

医療人として生命に関わることのできる薬剤師を育てるために、授業科目として「社会薬学Ⅰ」（1年次前期、必修、1単位）、「社会薬学Ⅱ」（1年次後期、必修、1単位）、「社会薬学Ⅲ」（2年次前期、必修、1単位）、「生命倫理学」（3年次前期、必修、1単位）、「医療倫理学」（3年次後期、必修、1単位）、「臨床心理学」（4年次前期、必修、1単位）を開講し、全学年（1～4年次）を通じたヒューマニズム教育・医療倫理教育を実施している。

「社会薬学Ⅰ」及び「社会薬学Ⅱ」は本教育領域の基礎編と位置づけられ、社会における薬剤師の果たすべき役割、責任、義務を正しく理解するために、薬剤師とくすりの関係、薬剤師と法律、薬剤師と倫理、医薬品と薬事法などについて学ぶ。「社会薬学Ⅲ」は本教育領域の実践編と位置づけられ、医療全体を捉えることができるゼネラリスト育成の観点から、病院における薬剤師の責務、保険薬局における薬剤師の責務、チーム医療の中での薬剤師の役割、医薬品情報管理と薬剤師、医療保険制度と薬剤師などについて学ぶ。また、「生命倫理学」及び「医療倫理学」では、一般倫理学に始まり、応用としての生命倫理学及び医療倫理学について具体的な事例を通して学べるように配慮している。さらに「臨床心理学」において、医療提供者の心理、医療を受ける側の心理、更に心理療法などについて学び、相互の信頼関係や精神的健康の維持に必要な知識の習得を目指している。また、こうして得られた知識を技能・態度に反映させる目的で、4年次の「実務実習事前教育」では模擬患者（SP）を積極的に活用したロールプレイを行い、薬剤師実務についている指導薬剤師（嘱託非常勤講師）のフィードバックを通して、実際の臨床現場

に即した教育を行っている。【観点 2-1-1-1】【観点 2-1-1-2】【観点 2-1-1-3】

(2-2) 教養教育・語学教育(24単位；卒業要件の教養教育単位数+教養以外の英語教育単位(選択も含む))、(2-3) 医療安全教育(7単位；「社会薬学Ⅲ」、「安全管理医療」(選択)、「実務実習事前教育」、「初期体験臨床実習」(選択))、(2-4) 生涯学習の意欲醸成(2単位；「薬学入門」、「早期体験学習」(「社会薬学Ⅲ」、「実務実習事前教育」は既出のため除く))、(2-5) 自己表現能力(2単位；「情報リテラシー」、「教養リテラシーA・B」(教養教育科目は除く))に関する単位数は35単位で、(2-1) ヒューマニズム教育・医療倫理教育の単位数に加えると合計40単位となり、卒業要件186.5単位の1/5以上を占めている。【観点 2-1-1-4】

(資料：シラバス－履修の手引－2009)

[点検・評価]

優れた点

- ・ 薬剤師のヒューマニズム教育・医療倫理教育を、1年次から4年次にかけて、基礎から応用(臨床)へと段階的に配置しており、十分な知識を持たない学生にとっても理解しやすい配慮がなされている。
- ・ 「社会薬学Ⅲ」は病院に勤務する臨床薬剤師が、「臨床心理学」は精神科医師が担当しており、実際の臨床に基づくヒューマニズム教育・医療倫理教育が行われている。
- ・ SPの活用によって、ヒューマニズム教育・医療倫理教育で得られた知識を技能・態度に結び付けることができる。

改善を要する点

- ・ ヒューマニズム教育・医療倫理教育において、医師・薬剤師以外の医療・福祉関係者(看護師、ソーシャルワーカーなど)、あるいは医療を提供される立場にある方々(患者やその支援団体など)の意見を求めることも必要と考える。

[改善計画]

特に早急な改善を求める問題点はないが、医療技術の急速な進歩や高齢化社会の到来によって、医療倫理的な判断を求められる課題は今後も増加するものと思われる。また、薬剤師の医療現場への進出によって、その責任の一端が薬剤師に向けられる可能性も増加している。したがって、今後も時代に即した授業内容の見直しを行う予定である。

## (2-2) 教養教育・語学教育

### 基準 2-2-1

見識ある人間としての基礎を築くために、人文科学、社会科学及び自然科学などを広く学び、物事を多角的にみる能力及び豊かな人間性・知性を養うための教育が体系的かつ効果的に行われていること。

【観点 2-2-1-1】薬学準備教育ガイドラインを参考にするなど、幅広い教養教育プログラムが提供されていること。

【観点 2-2-1-2】学生や社会のニーズに応じた選択科目が用意され、時間割編成における配慮がなされていること。

【観点 2-2-1-3】薬学領域の学習と関連付けて履修できるカリキュラム編成が行われていることが望ましい。

### [現状]

いわゆる教養教育プログラムを基礎教育科目と教養教育科目の二つに分けて実施している。基礎教育科目として、「数学Ⅰ」、「数学Ⅱ」、「生物学Ⅰ」、「生物学Ⅱ」、「物理学Ⅰ」、「物理学Ⅱ」、「基礎化学」、「基礎有機化学」、「統計学」などを必修の講義科目として、「情報リテラシー」、「教養リテラシー」を必修の演習科目としてそれぞれ開講している。教養教育科目として、「英語Ⅰ」～「英語Ⅷ」、1、2年次共通開講科目の教養選択科目の16講義と「総合文化演習Ⅰ」、「総合文化演習Ⅱ」(2、3年次必修)を開講している。

自然科学として、数学、物理学、生物学は、『薬学準備教育ガイドライン』で薬学の勉学に必要な科目と位置づけられている。また、上記の基礎教育科目は、高校教育から大学教育への連続性を円滑にするための導入教育(いわゆる高・大接続)の観点からも重要であるので、必修科目としている。人文科学、社会科学は『薬学準備教育ガイドライン』で〈人と文化〉として複数のものをバランスよく習得すべきものとされていることから、できるだけ多くの科目を学生が希望により自由に選ぶことのできる教養選択科目として開講している。【観点 2-2-1-1】

学習効果を高めるために、「数学Ⅰ、Ⅱ」と「英語Ⅰ、Ⅲ」は1年次の開講前にテストによって3段階の習熟度別クラス(A、B、C)に分けて40人程度の少人数での講義を行っている。「物理学Ⅰ、Ⅱ」、「生物学Ⅰ、Ⅱ」はそれぞれの科目の高校における履修歴に従ってクラス編成を行っている。また、大学における勉学全般の基礎力養成のために、コンピュータを使って情報処理を行う能力を養うための「情報リテラシー」と、日本語能力、コミュニケーション力養成のための「教養リテラシー」を開講している。1クラス35人程度の少人数教育を行うことで教育効果の向上を図っている。

教養選択科目の16の講義科目と「スポーツⅠ」、「スポーツⅡ」、「ドイツ語Ⅰ」、「ドイツ語Ⅱ」、「韓国語Ⅰ」、「韓国語Ⅱ」、「中国語Ⅰ」、「中国語Ⅱ」の中から8単位以上を修得することを卒業要件としている。6年制課程においては、1年次、2年次にわたって教養教育科目を履修し、一般教養を身につけることが望ましい。この視点から履修すべき教養選択科目(単位8単位以上)のうち1年次に修得できる単位は6単位までとし、2年次にも必ず教養教育科目を修得するもの

としている。

「総合文化演習Ⅰ、Ⅱ」には自然、人文、社会の各分野の4ゼミ、計12ゼミがそれぞれ用意されている。教養選択科目の多くは、総合文化演習で取り上げられるテーマと関連したテーマを扱っており（その場合、担当教員も共通）、学生はあらかじめ講義を受けた上で、演習に参加することが可能な体制が整っている。総合文化演習は、スモール・グループによる演習形式の授業の中核となるものであり、統合的視点や批判的視点で課題について思考する能力を涵養することを目的としている。1年次には、そのプレ・トレーニングとして「教養リテラシー」（基礎教育科目・必修）が置かれている。【観点 2-2-1-2】

“考える力”の養成という明確なコンセプトのもとで、教養教育科目間ばかりではなく、基礎教育科目や専門教育科目とも有機的に関連づけながらカリキュラムが構成されている。基礎教育と教養教育のカリキュラムの作成、実施、運営のシステムは、目下円滑に機能しており、問題は生じていない。基礎教育や教養教育に携わる教員もカリキュラム検討委員会、教務委員会、教授会に参加しており、専門科目を担当する教員との間に十分な意思の疎通が図られ、両者の緊密な連携が行われている。

薬学領域の学習と関連づける教養教育科目として、「医療と薬学の歴史」、「薬局経営論」、「医療と人間」などの講義を開講している。さらに「総合文化演習Ⅰ、Ⅱ」として〈医療について考える〉、〈コレステロールと病気〉、〈ガンはどうしてできるのか〉、〈放射線と暮らし〉などのテーマで9つのゼミを開講している。【観点 2-2-1-3】

（資料：シラバス－履修の手引－2009）

[点検・評価]

優れた点

- ・「総合文化演習Ⅰ、Ⅱ」、「情報リテラシー」、「教養リテラシー」で少人数クラスを採用している。
- ・多様な学生に対応するために習熟度別クラス、履修歴別クラスを採用している。
- ・「総合文化演習」では薬学領域の学習と関連づけたゼミも開講している。

改善を要する点

- ・特になし。

[改善計画]

特になし。

## 基準 2-2-2

社会のグローバル化に対応するための国際的感覚を養うことを目的とした語学教育が体系的かつ効果的に行われていること。

【観点 2-2-2-1】 英語教育には、「読む」、「聞く」、「話す」の全ての要素を取り入れるように努めていること。

【観点 2-2-2-2】 医療現場、研究室、学術集会などで必要とされる英語力を身につけるための教育が行われるよう努めていること。

【観点 2-2-2-3】 英語力を身につけるための教育が全学年にわたって行われていることが望ましい。

### [現状]

国際化の流れの中、英語力を身につけることは、薬学研究における英語文献の読解と薬剤師業務の現場におけるコミュニケーションの両面で、薬学生にとって必須である。そこで、英語教育に多くの科目を配当し、以下のように在学6年間を通して英語を学べる環境を構築している。

- 1年：「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「英語Ⅲ」、「英語Ⅳ」
- 2年：「英語Ⅴ」、「英語Ⅵ」、「英語Ⅶ」、「英語Ⅷ」  
(ネイティブ・スピーカーによる授業を含む)
- 3年：「薬学英語入門Ⅰ」、「薬学英語入門Ⅱ」
- 4年：「実用薬学英語Ⅰ」、「実用薬学英語Ⅱ」
- 5・6年：卒業研究における英語文献講読

ただし本学では、「語学（英語）」という科目設定は行わず、1、2年次の英語は基礎教育科目とし、3、4年次の科目は専門教育科目（薬学英語）に含めている。2年次に、すべての生徒がネイティブ・スピーカーによる英語の授業を必ず受講するようになっており、“読む”、“聞く”、“話す”の要素が取り入れられている。【観点 2-2-2-1】 【観点 2-2-2-3】

英語科目のうち、1年次の「英語Ⅰ～Ⅳ」では英語の基礎力の確立を目指しており、「英語Ⅰ～Ⅲ」は主に英文法の知識の整理、「英語Ⅱ～Ⅳ」はパラグラフ・リーディングを中心とした読解力養成を主眼とするものである。特に「英語Ⅰ、Ⅱ」では3段階の習熟度別クラス（A、B、C）を編成して、教育の効率化を図っている。2年次の英語は、3、4年次の薬学英語への橋渡しと位置づけ、「英語Ⅴ、Ⅶ」ではその内容を科学英語の基礎の習熟に置き、また、「英語Ⅵ、Ⅷ」ではネイティブ・スピーカーの教員も加わって、ヘルス・サイエンスの教材を使って、“話す”、“聞く”能力も併せた実用的なスキルの習熟を目的としている。3年次以降の教育では、将来医療現場あるいは研究、学会発表の場で実際に活用できる英語を習得するために、専門領域と強く結びついた薬学英語の教育カリキュラムが組まれている。【観点 2-2-2-2】

また、グローバル化に対応するために、英語教育以外にドイツ語、韓国語、中国語を選択科目として開講している。中国語と韓国語を加えたのは、神戸という土地柄から、学生が将来職業人

として接する可能性の高い外国語という理由からであるが、講義科目と並列の選択科目であるにもかかわらず、外国語学習に多くの学生が意欲を示しているのは歓迎すべきことであり、できるだけ希望を叶えるよう配慮している。

配当学年	科目名	受講者数			
		H18	H19	H20	H21
1、2年前期	ドイツ語Ⅰ	40	197	151	145
1、2年後期	ドイツ語Ⅱ	40	155	69	93
1、2年前期	中国語Ⅰ	39	71	39	59
1、2年後期	中国語Ⅱ	39	51	21	32
1、2年前期	韓国語Ⅰ	40	94	64	36
1、2年後期	韓国語Ⅱ	40	55	20	15

(資料：シラバス－履修の手引－2009)

[点検評価]

優れた点

- ・全学年にわたり、一般的なものから薬学の専門分野の英語まで、英語教育が行われている点は評価できる。
- ・英語は習熟度別のクラスが用意されていること。
- ・すべての学生がネイティブ・スピーカーによる授業を受けること。
- ・ドイツ語、中国語と韓国語の授業が開講されていること。

改善を要する点

- ・特になし。

[改善計画]

- ・特になし。



## (2-3) 医療安全教育

### 基準 2-3-1

薬害・医療過誤・医療事故防止に関する教育が医薬品の安全使用の観点から行われていること。

【観点 2-3-1-1】薬害、医療過誤、医療事故の概要、背景及びその後の対応に関する教育が行われていること。

【観点 2-3-1-2】教育の方法として、被害者やその家族、弁護士、医療における安全管理者を講師とするなど、学生が肌で感じる機会提供に努めるとともに、学生の科学的かつ客観的な視点を養うための教育に努めていること。

### [現状]

医薬品の安全使用に薬剤師が果たす役割の重要性の認識と、医療人としての意識の深化を図るため、次のような薬害、医療過誤、医療事故に関する教育を行っている。

1年次の「薬学入門」において入学直後から薬害の講義を行っており、医療過誤については2年次の「社会薬学Ⅲ」で現場の薬剤師による講義を行い、4年次の「安全管理医療」においては検査や食事などを含めた医療過誤、医療事故の概要やその対応、薬物による重篤な副作用の初期症状と副作用への対応について講義している。そして、同じく4年次の「実務実習事前教育」では演習形式によるSGDにより、調剤過誤や医療事故の事例をもとにした、その要因の解析とその回避法について学習している。【観点 2-3-1-1】

1年次において神戸大学医学部学生との合同講義では、患者会代表者による〈患者中心の医療について〉の講義とパネルディスカッションを開催しており、医師となる医学生や看護師や理学療法士、作業療法士、臨床検査技師となる保健学科学生などとともに、医療安全におけるチーム医療の重要性を把握できる機会を設けている。【観点 2-3-1-2】

(資料：シラバス－履修の手引－2009)

### [点検・評価]

#### 優れた点

- ・低学年より、医療安全に関する授業を設けており、学生が医療に対する心構えを養う教育を進めていることは評価できる。

#### 改善を要する点

- ・今後高学年においても実際、薬害被害者の方を講師にするなど、「病院実習」や「薬局実習」などの実務実習を受講する前に改めて医療安全に対する意識を向上させることも必要と考えられる。

[改善計画]

5年次において実務実習を受講する前に被害者やその家族、弁護士、医療における安全管理者を講師とするなど、学生が肌で感じる機会を提供することを予定している。また、神戸大学医学部との合同科目「IPW 演習」という科目を設定し、医学科学生、保健学科学生と多職種協働（IPW）でのチーム医療における薬物治療の安全性確保についても検討する、症例呈示による演習形式での授業科目の開講を予定している。



## (2-4) 生涯学習の意欲醸成

### 基準 2-4-1

医療人としての社会的責任を果たす上での生涯学習の重要性を認識させる教育が行われていること。

【観点 2-4-1-1】 医療現場で活躍する薬剤師などにより医療の進歩や卒後研修の体験談などに関する教育が行われていること。

#### [現状]

神戸薬科大学では、昭和50年から卒後教育講座（現卒後研修講座）を毎年開講するなど卒後教育の重要性を認識し、本学の卒業生のみならず、広く社会で活躍する薬剤師の資質向上と生涯研修に力を注いでいる。そして平成19年には有限責任中間法人薬剤師認定制度認証機構から生涯研修認定の実施団体として認証を受け、生涯研修を推進するためにエクステンションセンターを新たに設置し、生涯学習のための種々の講座やセミナーを開催している。

これらの実績をもとに授業科目においては入学当初から生涯教育の必要性を意識づけるように、1年次「薬学入門」で病院や薬局で活躍している薬剤師を講師として招き、医療現場での薬剤師の業務について講義を実施するとともに、「早期体験学習」で病院や薬局を学生各自でテーマを持って訪問学習することを行っている。2年次の「社会薬学Ⅲ」では医療現場で活躍中の薬剤師を非常勤講師として迎え、医療の現場における薬剤師のスペシャリストとしての責務と医療全体を捉えることができるゼネラリストとしての使命を認識できるようにしている。4年次における「実務実習事前教育」などでも、100名を超える現場の薬剤師が指導薬剤師として講師陣に加わり講義やSGD形式での演習で薬剤師業務の改善・向上について教育している。これらの科目を通して、医療の進歩に対応し医療人として社会的責任を果たすためには、生涯学習が重要であることを認識させている。また、毎年メインテーマを定めて3日間開催している卒後研修講座への学部学生の参加は無料とし、自主的に参加できる機会を提供している。【観点 2-4-1-1】

#### [点検・評価]

##### 優れた点

- ・「実務実習事前教育」では100名を超える現場の薬剤師を指導薬剤師として迎え、最近の医薬品の使用動向の推移など調剤などにかかわる生涯研修の重要性について身近な形で教育が行われていることは評価できる。

##### 改善を要する点

- ・特になし。

#### [改善計画]

特に改善すべき点はないが、今後も、神戸薬科大学の生涯研修の実績を生かして医療人としての責務として生涯研修の重要性を把握するような学内広報活動のより一層の充実を行う。また、専門薬剤師として活躍する卒業生などによる講演を就職支援セミナーなどでも実施する。

## (2-5) 自己表現能力

### 基準 2-5-1

自分の考えや意見を適切に表現するための基本的知識、技能及び態度を修得するための教育が行われていること。

【観点 2-5-1-1】聞き手及び自分が必要とする情報を把握し、状況を的確に判断できる能力を醸成する教育が行われていること。

【観点 2-5-1-2】個人及び集団の意見を整理して発表できる能力を醸成する教育が行われていること。

【観点 2-5-1-3】全学年を通して行われていることが望ましい。

### [現状]

医療系実務の現場におけるコミュニケーション、プレゼンテーション、そしてSGDを適切に行うための知識、技能、態度の重要性については議論の余地がない。現行のカリキュラムはこの点についても十分に配慮した上で編成されたものであり、以下に列挙する講義、演習がこうした能力の育成に有効に機能している。

#### 【1年次】

「情報リテラシー」(基礎教育科目、必修、1単位)：インターネット、データベースなど、コンピュータを利用した情報の収集と活用法を学ぶ。

「教養リテラシー」(基礎教育科目、必修、1単位)：日本語能力(読解力、表現力、文章力)、プレゼンテーション能力を修得させる。

「早期体験学習」(専門教育科目、必修、1単位)：創薬、医薬品供給、医療、福祉の現場などを体験し、将来医療の担い手となる自覚を持たせる。

「初期体験臨床実習」(専門教育科目、選択、1単位)：神戸大学医学部生との混成チームを構成して保健医療の現場を訪問し、医療従事者と接することによりチーム医療と多職種間協働の重要性を学ぶ。

#### 【2年次】

「総合文化演習Ⅰ」(教養教育科目、必修、2単位)：自ら問題を設定して解決の手段を考案し、他者との討論において他者の主張を理解するとともに自らの主張を論理的に展開する力を養う。

#### 【3年次】

「総合文化演習Ⅱ」(教養教育科目、必修、2単位)：同上。

#### 【4年次】

「実務実習事前教育」(専門教育科目、必修、4単位)：卒業後、医療に参画できるようになるために、「病院実習」・「薬局実習」に先だって、大学内で調剤及び製剤、服薬指導などの薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度を修得する。

「教養リテラシー」、「総合文化演習Ⅰ」、「総合文化演習Ⅱ」は、特に聞き手及び自分が必要とする情報を把握し、情報を的確に判断できる能力を醸成することを主な目的とするものである。

### 【観点 2-5-1-1】

また、これらの科目及び「早期体験学習」、「初期体験臨床実習」、「実務実習事前教育」の科目では少人数グループ単位で討論することを重視し、グループの総意を発表する場を設けているため、個人及び集団の意見を整理して発表できる能力も醸成される。【観点 2-5-1-2】

また、1～4年次を通じて、各種の実習（基礎化学、生物学系、有機化学系、分析化学、生薬化学、物理化学、衛生薬学系）が組み込まれているが、教員との実験結果についてのディスカッションを義務づけているものが多い。したがって、全学年を通じて標記の教育が行われている。

**【観点 2-5-1-3】**

（資料：シラバス－履修の手引－2009）

[点検評価]

優れた点

- ・全学年、種々の科目にわたって、自己表現するための基本的知識、技能及び態度を修得するための教育が行われている。

改善を要する点

- ・特になし。

[改善計画]

特になし。